

巻頭言

教科書を作ろう

會田 勝美

日本農学アカデミー副会長・東京大学名誉教授

もう 10 年以上も前になるが、ある国立大学の教授を 1 年間併任したことがある。大学院も担当したので、修士課程の学生さんにも講義をすることにした。そこで私の専門分野である魚類内分泌学や生殖生理学について、少し先端的な研究成果もまじえて講義しようと思ひ、第 1 回目の講義の時、「学部時代に、魚類内分泌学や生殖生理学の講義は聴いたことがあるよね」と聴いてみたところ、どうも講義では聴いていないとのことで、ビックリしたことがある。

私のいた大学とほぼ同じタイトルの学部講義はあったのだが、魚類生理学に関するジェネラルな講義の中に魚類内分泌学や生殖生理学の項目は入っていなかったようだ。そこで思ったのだが、おそらく全国の水産系大学には、魚類生理学に関するような講義はきっとあるだろうが、その内容は、必ずしも皆同じではないのではないかということだった。もちろん調べてみれば良かったのだが、調べる時間もないので勝手にそう思った。

水産を目指した学部生の時代には、多くの事を学ばなくてはならないが、魚類の内分泌や生殖に関する基礎的な知識は持っていてほしかった。どうも大学の講義となると、どの大学でも講義内容は担当教員の判断で決められているようであった。

かつて東大農学部が大学院重点化を目指した際に、当時の学部長から、大学院重点化をするのだから、学部の講義を 2/3 に減らして、あまった時間を大学院の講義の充実にあててほしいと要請された。その時、同時に学部の講義は、先生方の所属する講座のものではないし、まして先生個人のものでもないとも言われた。私は当時、学部長の補佐でもあったので、忠実に水産学科の講義を 2/3 に削減した。私は、講座担当の講義として水産動物解剖学と水産動物生理学、それに水産動物発生学の 3 科目を担当していたので、解剖学を生理学に含める形にして、2 科目に減らした。しかしある学科は、あまり減らさなかったように思われる。どうも講義を減らすと、教員のポストもいらぬのではないかと将来のポスト削減を恐れたのかもしれないし、退職された先輩から、何故講座の講義を減らしたのかと後日詰問されることを恐れたのかもしれない。

上述したようなことがあったので、その後、出版社の依頼もあり、「魚類生理学の基礎」という教科書を作ることにした。特に魚類解剖学の内容を、総論として簡潔に纏めて、第1章とした。また教科書に記載すべきことは全て幅広く網羅した。その後、「水圏生化学の基礎」、「水圏生態学の基礎」「水産利用学の基礎」が作られた。

私が学生であったころ、確か水産学総論という講義があつて、そのような題名の教科書があつたのだが、担当していた教授が退職されたあと暫くして、その講義はなくなった。おそらく水産学が発展して細分化され、総論や概論を講義出来る先生がいなくなったのかもしれない。そこで、「水圏生物学入門」という教科書を作つたのだが、あまり売り上げは芳しくない。後に気がついたので、もう何処の水産系大学でも水産学総論や水産学概論の講義が存在しないので、教科書として学生さんの需要が無いらしい。とんだ見当違いだったのだが、教科書ができたので、そのうち講義も復活するだろう、そうすれば売れ出すだろうと思っている。その後、この「水圏生物学入門」は英語版にもなった。アジアで水産学を学んでいる学生さんに利用していただければ幸いと思っている。

魚類生理学として教えるべき内容をもった教科書ができると、全国の水産系大学で魚類生理学の講義用教科書として利用していただけると、大体どの大学にいても同じ内容を履修できるので、大学院修士の入学試験の参考書としても指定できるし、なにしろ各大学の先生方の講義資料作成の手間が省け、その分の時間を研究や社会貢献に割けるかもしれない。教科書が出来ると、学部の担当教員は不要だと言われかねないと心配する向きもあるが、それぞれの講義に、教科書に無い新しい事柄の資料を追加することにより違った味を出せるかもしれないし、学生とのフェース to フェースのコミュニケーションに時間が割けるかもしれない。

かつて、有名予備校のカリスマ教師の講義がビデオに撮られ、全国各地の分校で利用されていることが話題になった。

「魚類生理学の基礎」は2002年12月に初刊第1刷が出たのだが、現在、第4刷までできた。第5刷は増補改訂版として刊行すべく準備中である。同じ内容の教科書を出し続けると、先輩から後輩に教科書を譲るケースが増えるため、売れなくなるらしいし、また、10年近く経つと新しい知見もでてくるので、出版社の依頼に応じて増補改訂版を企画・作成している段階である。

前述した「水圏生物学入門」は、大学で水産学を学ぶ学生の方々や水産学を学ばずに水産系大学院に進まれる学生の方々に利用していただくことを念頭に置いた。ところで、農学系学部はミニ総合大学と言ってもよいほどに多様な分野を包含しており、私自身は農

学部教員として長年在籍しながらいわゆる「学科の壁」に遮られたこともあり、他分野については全く勉強する機会を逸してきた。そのことへの反省もあり、本書を企画した背景には、他分野の農学系教員の方々に、本書を利用することにより、比較的容易に水圏生物科学全般を知っていただきたいとの願いもあった。しかし、どうもあまり利用されていないようだ。もっとも、自分も若かりし頃は、自分の専門分野の研究に追われており、他分野にはとても手が回らなかったのだから、仕方がないと思っている。

先任の教授が停年で退職された後、水産動物発生学の講義を水産学科に進学内定した 2 年生にしなければならなくなった。私の専門は生殖生理学であり、配偶子形成の部分は専門であったのだが、いわゆる受精後の本来の発生学の部分は門外漢であった。そこで、めぼしい教科書を数冊買い込み、研究論文を漁って、一夜漬けで講義録を作り始めた（実際は一回 1 時間半の講義録の作成には 1 週間程度かかったが。）。その時、発生学の部分は人の受け売りで、決して自分の眼でみたことではないことに気がついた。そして同時に、中学や高校の生物の先生もきっと自分の眼ですべて確認していないことを、あたかも見てきたように話をしているのではないかと思った。生徒は、受験に合格するには、先生の教えることを疑いもせず覚えることが必要だろう。私の講義を聴いている学生は、そうやって東大に合格したに違いない。そこで発生学の講義にあたって、私は正直に、私の講義する内容は、自分で確認していないことも含まれているから、将来は否定されるかもしれないので、そのつもりで聴いてくれとお願いした。また、教科書に書いてあることはあまり信用するな、むしろ東大に入って研究者になることを目指すなら、教科書を塗り替えるような仕事をするべきだとも言った。それを聴いた学生はかなり面食らったらしいが、その中の一部の学生は大学の教師になった今も、当時のことを覚えているらしい。まあ、ハッタリと思った学生もいたようだが。

水産動物発生学の教科書もぜひ作ってほしいと出版社の担当者からは長年依頼されていたのだが、この分野の進展が早いこともあり、とても自分の手におえないと思い、新進気鋭の若手の先生方に作成をお願いした。「魚類発生学の基礎」になるそうだが、どの様な教科書ができるのか、楽しみにしている。